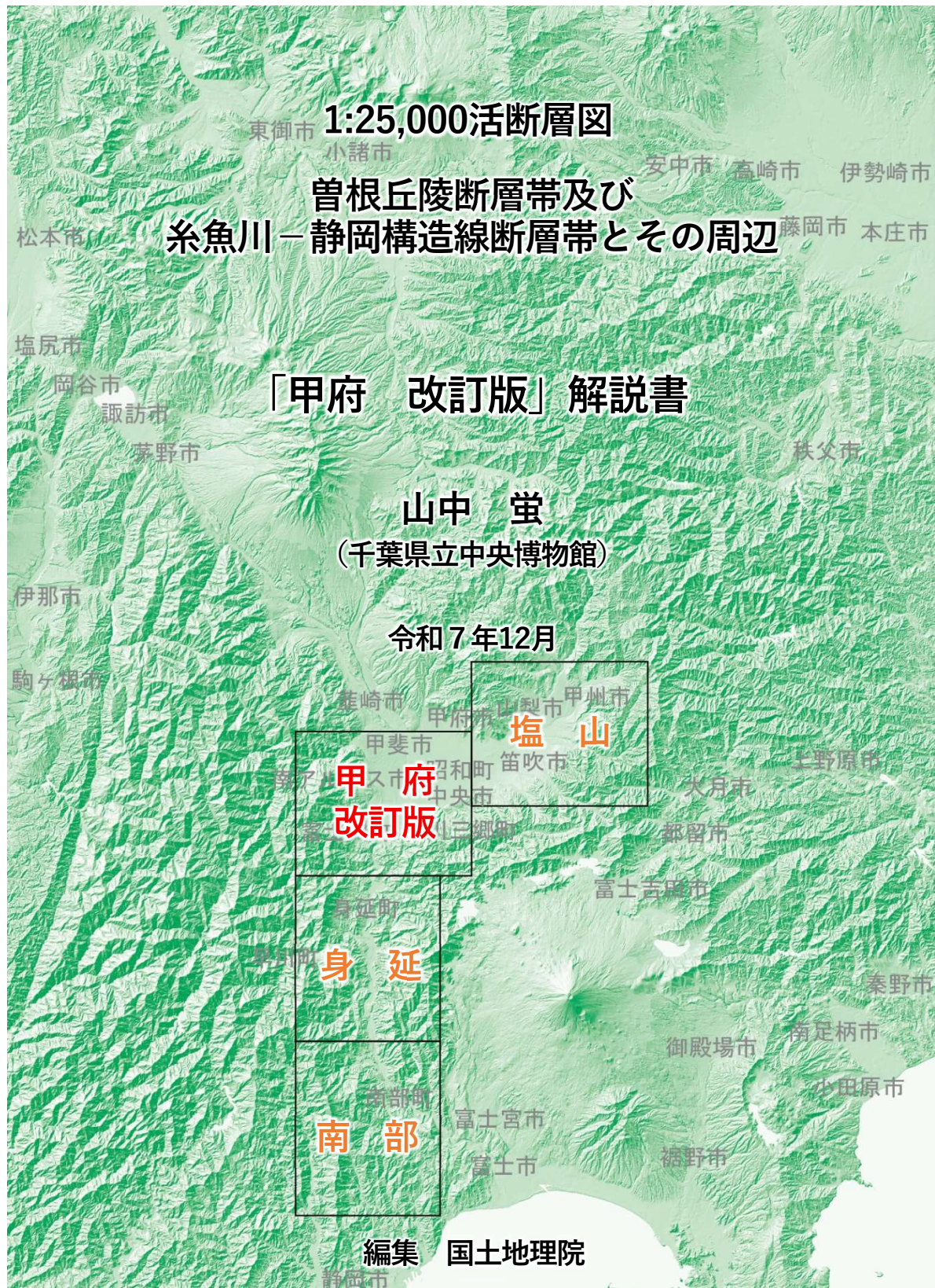


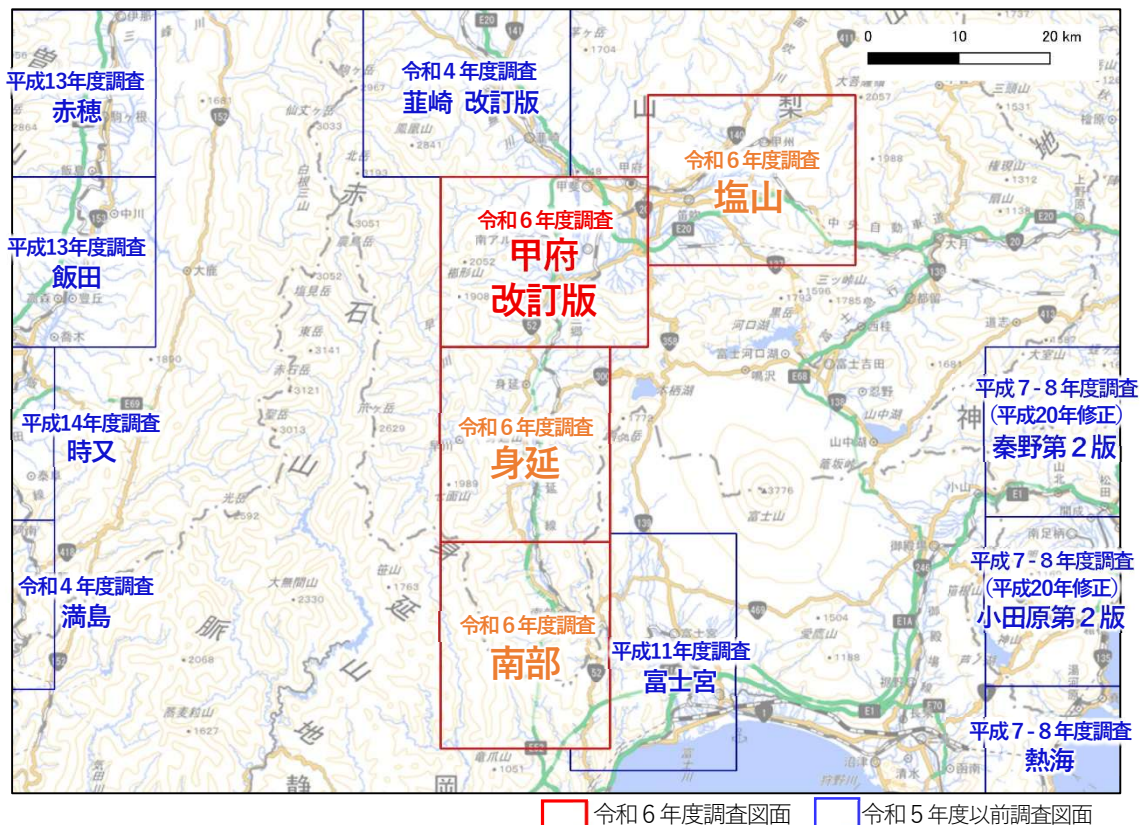


目 次

曽根丘陵断層帯 曽根丘陵断層帯及び糸魚川－静岡構造線断層帯とその周辺

「甲府 改訂版」解説書

1. 曽根丘陵断層群 ^{そねきゅうりょう}	2
2. 下門井断層 ^{しもつばらい}	9
3. 市之瀬断層群 ^{いちのせ}	10
4. 富士見山断層群 ^{ふじみやま}	15
5. 大駒鹿峠付近の断層 ^{おおなしかとうげ}	17
6. 櫛形山断層群 ^{くしがたやま}	18
7. 南アルプス市駒場南方の断層 ^{こまば}	19
8. 南アルプス市高尾付近の断層 ^{たかお}	19
9. 伊那ヶ湖付近の断層 ^{いながこ}	19
10. 源氏山西方の断層 ^{げんじやま}	20
11. 市川三郷町落居から岩間に至る断層 ^{いちかわみさとちょうおち いわま}	20
引用文献	21
調査に使用した諸資料及び検討委員会等	23
付図（断層索引図）	26



1:25,000活断層図「甲府 改訂版」作成位置図

1:25,000 活断層図 曾根丘陵断層帯及び糸魚川－静岡構造線断層帯とその周辺「甲府改訂版」解説書

曾根丘陵断層帯は、山梨県甲州市から^{ふえふき}笛吹市、甲府市、中央市を経て、西八代郡市川三郷町^{いちかわみさとちょう}に至る断層帯である。全体の長さは約 32 km で、概ね北東－南西方向に延びる。本断層帯は断層の南東側が北西側に対して相対的に隆起する逆断層である（地震調査研究推進本部地震調査委員会 2006）。

糸魚川－静岡構造線断層帯は、長野県北安曇郡小谷村^{きたあづみ おたり}付近から、同郡白馬村^{はくば}、大町市、同郡池田町^{あづみの}、安曇野市、松本市、塩尻市、岡谷市^{おかや}を通過し、諏訪郡下諏訪町^{す わ}、諏訪市、茅野市、同郡富士見町^{ち の ふ じ み}を経て、山梨県北杜市^{ほくと}、韮崎市^{にらさき}、南アルプス市、南巨摩郡富士川町^{みなみこま ふじかわ}、同郡身延町^{みのぶ}を通り、同郡早川町^{はやかわ}付近に至る、北北西－南南東方向に延びる長さ約 158 km の断層帯である（地震調査研究推進本部地震調査委員会 2015）。

この断層帯は4つの区間（北より順に、北部（小谷－明科^{あかしな}）区間、中北部（明科－諏訪湖南方）区間、中南部（諏訪湖北方－下葛木^{しもつたき}）区間、南部（白州－富士見山^{はくしゅう ふじみやま}）区間）に区分される（地震調査研究推進本部地震調査委員会 2015）。本図には、北杜市から早川町に至る白州－富士見山区間の中央から南部が含まれる。

本図は、1:25,000 都市圏活断層図「甲府」（今泉ほか 1998）（以下「初版図」という。）の改訂版であり、初版図成果を踏まえながら、新たな調査と、初版図刊行後に蓄積した知見を基に作成した。

本図には、曾根丘陵断層帯を構成する曾根丘陵断層群^{そねきゅうりょう}、糸魚川－静岡構造線断層帯の南部区間（白州－富士見山区間^{はくしゅう ふじみやま}）を構成する断層のうち下円井断層^{しもつばらい}、市之瀬断層群^{いちのせ}、富士見山断層群と、その他の推定活断層を記載している。

以下に、各断層の概要と判読した根拠を記載する。（下記の断層ごとの番号及び記号は、巻末の付図（断層索引図）に記載した番号及び記号に対応）。

1. 曾根丘陵断層群^{そねきゅうりょう}

- ・走向 : 北東－南西
 - ・長さ : 約 11 km
 - ・断層種別 : 活断層（縦ずれが主体、一部活撓曲、活褶曲を含む）
- （※上記の各諸元については、本図内における計測及び確認結果である）

(1) 概要

曾根丘陵断層群は、本図の東側に隣接する 1:25,000 活断層図「塩山」(安江ほか 2025) 図面内の甲州市勝沼町苦名付近から本図の市川三郷町下大鳥居付近まで、北東－南西方向に延びる、縦ずれの変位を主体とする活断層である。

本図には図面東端(笛吹市間門付近)から市川三郷町下大鳥居付近まで、北東－南西方向に延びる、長さ約 11 km の区間が記載されている。縦ずれの変位を主体とした多数のトレースが走向方向に分布しており、トレースと並行した複数の活撓曲及び活褶曲が分布している。

(2) 判読根拠

本断層の主な地点ごとの判断根拠は次の通りである。

1a: 市川三郷町下大鳥居付近の曾根丘陵断層群西端から市川三郷町上野までの範囲を示す。

初版図(今泉ほか 1998)では、甲斐上野駅南方、旧三珠町役場の東 150m の地点以東の山麓線に沿う南側隆起の活断層と、その北(盆地側)に 400m 離れて並行に分布する南側隆起の活断層(活撓曲を伴う)の 2 条のトレースが図示されていた。また、両者のうち盆地側トレースのみが本図における曾根丘陵断層群西端付近まで引かれていた。

本図では、丸山・斉藤(2005)により見出された芦川右岸の低位段丘面群を累積的に上下変位させる低断層崖、および盆地側トレースの撓曲崖中腹で段丘面の不連続をもたらす低断層崖を、LiDAR に基づく 1mDEM のステレオ画像および空中写真の判読により追認した。これにより、山地側トレースは芦川右岸付近まで延長され、盆地側トレースにも撓曲崖中腹に南側隆起の低断層崖が追加された。なお、芦川右岸一帯は市街地となっており、LiDAR データに基づくことで、丸山・斉藤(2005)と比べ、芦川駅北西付近の山地側トレースの低断層崖は東西に近い走向で認定された。また、盆地側トレースの撓曲崖中腹に分布する低断層崖は 1 条のみ認定された。芦川の扇状地性沖積面には変位は認められず、活断層は伏在していると考えられる。

芦川西岸では、従来から図示されてきた盆地側トレースの約 200m 南を並行する、下位段丘面を変位させる南側隆起の低断層崖が新たに認定された。同トレースの西延長部は山麓線を連ねる位置を通過し、小規模な河谷の谷口において下位段丘面(浅間神社が位置する下位段丘面を含む)に撓曲が認められる。この新たに認定された山地側トレースは、山麓線を連ねるような分布の特徴が共通することから、芦川東岸の山地側トレースの西延長にあたる可能性がある。

本図では新たに、芦川左岸の下位段丘上に分布する山地側トレースの南方において、長軸の長さ約 200m の小規模なテクトニックバルジ（活断層の活動によって生じた地形の高まり）が 2箇所 で近接して発達することが認められた（写真 1）。これらは左ステップに雁行し、いずれも長軸は西北西―東南東方向で、曾根丘陵断層群の一般走向（西南西―東北東）とは斜交する。現地の露頭で観察されたバルジの構成層は大礫以下の角～亜角礫を多量に含む淘汰（堆積物を構成する粒子の大きさのそろい具合）の悪いマトリクスサポート（礫よりもその隙間を埋める砂や泥が多い様子）の堆積物であり、芦川本流の扇状地堆積物を被覆した支流性の土石流堆積物と考えられる。したがって、これらのバルジは、初生的には北～北西へ傾斜した沖積錐性の地形面が内作用によって隆起した地形と考えられ、南北両翼の基部に不明瞭ながら傾斜変換線が認められることから、この位置に活断層（位置やや不明瞭）を認定した。



写真 1 芦川左岸段丘面上のバルジ（東側のバルジを北から撮影）
（2025 年 2 月 4 日 山中撮影）

地下構造調査（山梨県編 2004 など）により、甲府盆地南西端付近には第四紀の堆積物が厚く分布することが推定されている。曾根丘陵断層帯は御坂山地（曾根丘陵南方に位置する山地）の北縁に沿って本図のトレースよりさらに西方に延長する可能性があるが、変位基準となる段丘面の分布が乏しいことなどから、本図では西方延長部を認定することはできなかった。

1b：市川三郷町上野付近を西端とし、浅利川を東端とする範囲を示す。北東―南西に延長 1.4～2.0 km 程度のテクトニックバルジが 3 列平行して分布する（写真 2：位置は巻末付図にて図示）。最も盆地側のバルジ（以下、盆地側のバルジと呼ぶ）は三者の中では規模が著しく小さく、笛吹川の沖積低地内に細長い島状に発達しており、沖積低地との最大比高は 12m、最大幅は 70m 程度である。これと比較して、盆地側のバルジの南東に発達する 2 列のバルジ（北から、中央のバルジ、山地側のバルジと呼ぶ）は規模が大きく、中央のバルジは沖積低地との比高約 60m、幅は 500m 程度である。山地側のバルジは中央のバルジよりも軸部が 20～60m 程度高く、幅は

同程度である。なお、盆地側のバルジは、西端部を除き、現在は改変によって大部分が消失している。



写真2 バルジの写真 (2020年9月30日 山中撮影)

背面がいずれも上位段丘面に対比される中央のバルジと山地側のバルジは、山地側へ階段状に高度を増すことから、これらのバルジを成長させた活断層は各バルジの北西翼斜面基部に認定された。なお、中央のバルジ北西基部の活断層は初版図においては認定されていない。仮に、笛吹川の側方侵食が中央のバルジ北西麓を侵食した後に、その後の断層運動で盆地側のバルジが発達したと考えれば、中央のバルジ北西翼斜面は侵食崖ということになる。しかし、中央のバルジと盆地側のバルジの間の沖積低地は段丘化しておらず、盆地側のバルジを挟んだ笛吹川付近の沖積低地と標高がほとんど異なることから、この部分は盆地側のバルジ前縁の断層運動に伴う隆起にほとんど参加していないと考えられる。したがって、中央のバルジの北西翼斜面は侵食崖ではなく、盆地側のバルジとの間を沈降させる南側隆起の活断層の断層崖と判断した。なお、中央のバルジの北西基部の活断層は、市川三郷町大塚の東方から浅利川の間では最も盆地側に分布する活断層である。この断層の北東延長部では、浅利川の扇状地面上に東西方向に伸びる北落ちの低崖が認められ、川の流下方向と直交し、河川の侵食では形成し得ない崖であることから、これを低断層崖と判断し、その基部に活断層を認定した。

中央のバルジの市川三郷町大塚における北西斜面には、バルジを侵食する小河川の流下方向を横切るように北東－南西に延びる幅 50m のグラーベン（地溝：両側を断層崖で限られた溝状の凹地地形）状の地形が認められることから、その南北両縁の低崖の位置に活断層を認定した。

盆地側のバルジは、その南北に広がる沖積低地より相対的に隆起することから、活断層はバルジの南北両翼の基部に認定される。ただし、この区間内では、御坂山地を発する河川がバルジを横切って盆地に流下しないことから、曽根丘陵断層群の

他の区間と比較して、笛吹川の沖積低地内に突出する扇状地が乏しい。これにより、活断層分布域が笛吹川の側方侵食を受けやすく、盆地側のバルジは北西側が侵食されて北西側基部における活断層の位置は不明瞭である。なお、市川三郷町大塚付近に発達する盆地側のバルジ残存部分（写真3）では、丸山・斉藤（2006）及び産業技術総合研究所（2017）により、バルジの南東側基部においてトレンチ掘削調査が行われ、いずれにおいても北側（バルジ側）が相対的に隆起する高角な活断層が確認されている。



写真3 盆地側のバルジ残存部分（市川三郷町大塚）
（2025年2月4日 山中撮影）

1c： 浅利川から図面東端までの範囲を示す。この区間では、曽根丘陵の北縁に沿って隆起したテクトニックバルジが発達し、御坂山地から甲府盆地に流下する河川（西より、浅利川、七覚川、滝戸川、間門川）がこれらのバルジを1.1 km～1.5 kmの間隔で横切り分断する。バルジ背面に分布する上位段丘面や中位段丘面は、バルジ頂部より南東において河川の流下方向とは真逆の南東へ傾動することから、バルジ北縁の基部における逆断層運動が推定される（澤 1981）。

活断層のトレースは、上記のバルジの盆地側基部に認定される。多くの位置で、バルジ基部は崖錐に覆われ、活断層の位置は不明瞭である。本区間西部の浅利川と七覚川の間では、バルジの基部にわずかに撓曲崖が発達し、その基部の位置を活断層と判断した。

浅利川右岸では、扇状地上に東西方向に延びる北落ちの低断層崖が認められた。その東にある七覚川の扇状地西翼部には、東西方向に延びる撓曲崖状の地形が連続的に分布し、この位置に活断層を認定した。ただし、その西端付近では丸山・斉藤（2006）により群列ボーリング調査およびトレンチ調査が行われ、低崖を挟んで表

層部の地層が変形していないことが明らかにされている。しかし、沖積低地と同様の比高を持つ下位段丘面はこの低崖より盆地側には発達せず、下位段丘面の離水は断層運動に伴う相対的な隆起と関係して生じたと考えられる。トレンチ掘削が行われた付近では、それ以東で東西方向の崖が北東－南西方向に走向を著しく変化させており、侵食や人工改変に伴って崖の位置が後退した場所の可能性がある。したがって、七覚川左岸の崖地形は活断層（位置やや不明確）に分類した。

浅利川と七覚川の間の中位段丘面上では、バルジ背後においてバルジ頂部側が相対的に低下する短い低断層崖が2条分布する。これらはバルジの発達に伴う副次的な活断層と考えられる。

七覚川と滝戸川の間では、活断層はバルジの麓部に沿って分布すると考えられるものの、両河川が天井川化し、これに伴う河道周辺の土砂堆積により、バルジ基部は被覆されて自然の地形は不明瞭である。

滝戸川右岸の八王寺－円明寺間では、滝戸川の扇状地起源とみられる下位段丘面が発達することが認められた（図1）。この面は、笛吹川の氾濫原とは不連続であり、面の分布域より北西側での断層運動に伴う隆起がなければ離水しないと考えられる。また、面の北西縁に沿って撓曲状の変形を伴う（図1、写真4）ことから、この撓曲基部を新たに活断層と判断した。



図1 滝戸川右岸の下位段丘面を撓曲変形させる活断層付近のアナグリフ
(国土地理院撮影空中写真 CCB7516 C9-19, 20から作成)

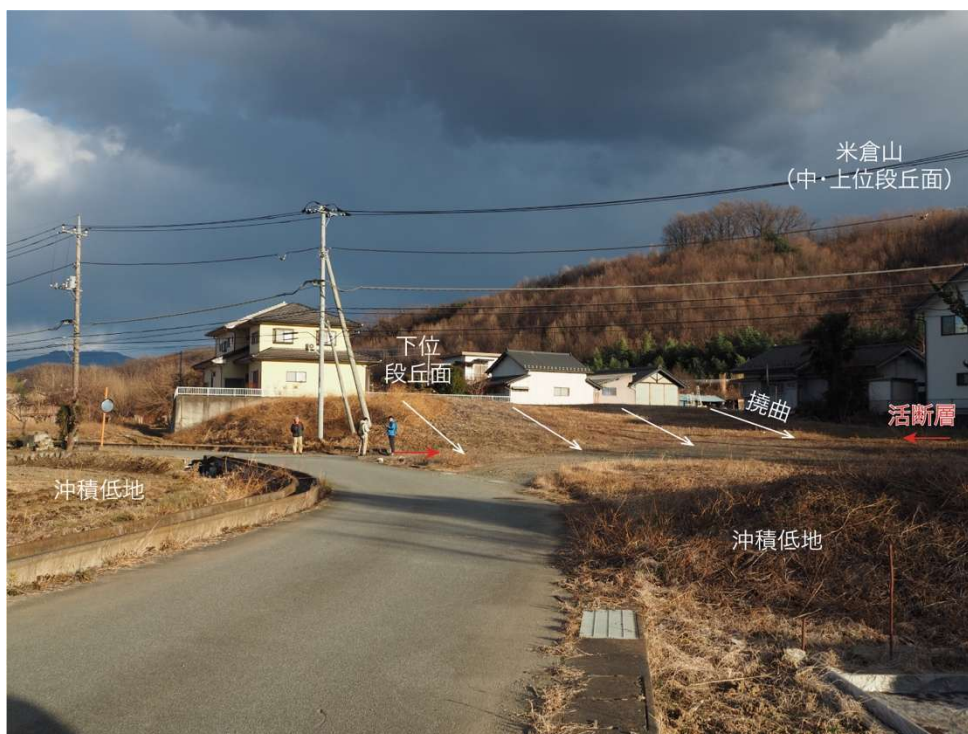


写真4 八王寺―円明寺間で確認された撓曲崖 (2025 年 2 月 4 日 山中撮影)

滝戸川と間門川の間では、バルジの麓部と、そこから数十～150m 盆地側の位置に活断層が分布する。バルジ麓部のトレースは、バルジ基部に発達した沖積錐および滝戸川右岸の下位段丘面を変位させる北落ちの低断層崖により認定される (図2)。盆地側のトレースは、沖積錐を変位させる盆地落ちの撓曲崖により認定される (図2)。盆地側のトレースは本図により新たに認定された。

1d：市川三郷町大塚以東の曽根丘陵内に分布する東西走向の活断層を指す。本断層は1aにおける山地側トレースの東延長にあたる。谷坂川に沿って上位段丘面に北落ちの変位が認められる。また、東端の大鳥居付近では、中位段丘面に北落ちの変位が認められる。

1e：中央市大鳥居付近では、中位段丘面と下位段丘面が東北東―西南西方向に長軸を持つ背斜状の変形を受ける。変形は中位段丘の方が下位段丘面よりも著しく、背斜の成長が累積していると考えられる。背斜状変形帯の南北の基部には傾斜変換が認められ、この位置に背斜を成長させる活断層が認定される。

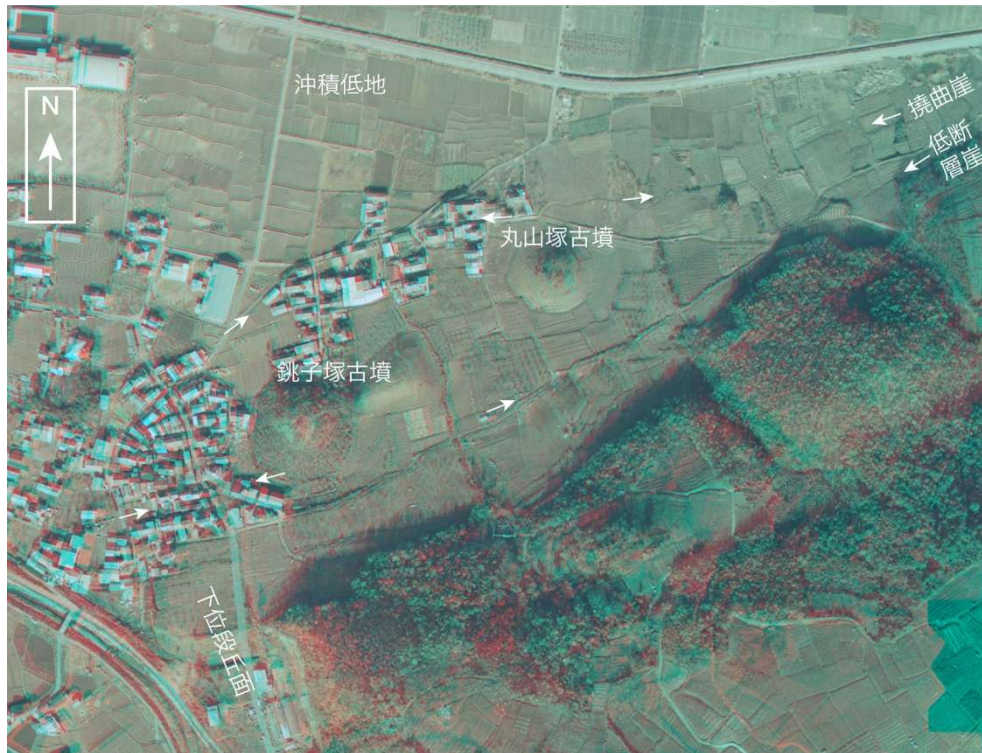


図2：新たに確認された活断層区間付近の空中写真アナグリフ
(国土地理院撮影空中写真 CCB7516 C9-19, 20 から作成)

1f: 中央市川^{かわひがし}東から同市木原の間では、中位下位段丘面に東北東－西南西方向に長軸を持つ背斜状変形が約2km にわたって認められる。この背斜状変形は南北でやや非対称であり、背斜北翼の傾斜は南翼に比べて緩やかである。したがって、背斜南縁の急崖基部の背斜を成長させる活断層と判断した。

2. ^{しもつぶらい}下円井断層

- ・走向 : 北北東－南南西
- ・長さ : 約1 km
- ・断層種別 : 活断層（縦ずれが主体）、推定活断層

(※上記の各諸元については、本図内における計測及び確認結果である)

(1) 概要

下円井断層は、北側に隣接する「^{ありの}葦崎 改訂版」（中埜ほか 2023）から連続し、南アルプス市^{ありの}有野付近まで延びる活断層である。本図には北縁の図郭から南アルプス市^{ありの}有野付近まで、北北東－南南西方向に延びる長さ約1 km の区間が記載されている。縦ずれの変位を主体とし、一部伏在部と推定活断層を含む。

(2) 判読根拠

韮崎市旭町上^{かみじょう} 條南割付近では、山麓線に沿って御勅使川の流向と直交する東落ちの低断層崖が断続的に分布する。さらに、図郭北縁付近では、隆起側にも2条、東落ちの低断層崖が認められる。御勅使川の扇状地では、上記の低断層崖延長部に変位は認められず、市之瀬断層群との間で活断層は伏在していると考えられる (Ikeda et. al. 2009)。なお、上記の低断層崖の約300m西方には、山地斜面に逆向きの崖が認められるが、変位基準となる段丘面に乏しく、変位の累積性が不明なことから、推定活断層とした。

3. 市之瀬断層群^{いちのせ}

- ・ 走向 : 北北西－南南東
- ・ 長さ : 約13 km
- ・ 断層種別 : 活断層 (縦ずれが主体、活撓曲、地形面の傾動、一部左横ずれを含む)、推定活断層

(1) 概要

市之瀬断層群は、南アルプス市有野^{ありの}付近から富士川町入町^{いりちょう}まで、北北西－南南東方向に延びる長さ約13 kmの活断層である。甲府盆地西方の扇状地と下位～上位段丘面上及び山地の境界付近に、縦ずれの変位を主体とし活撓曲を伴うトレースが多数分布している。

本断層群は、市之瀬台地周辺に代表されるように、段丘面の西縁すなわち山地斜面基部に沿うように伸びる境界断層と、下位段丘面と扇状地面を境する前縁断層の大きく分けて2条のトレースが、湾曲を伴いながら大局的には南北方向に分布している。

(2) 判読根拠

本断層の主な地点ごとの判断根拠は次の通りである。

- 3a: 御勅使川から大和川^{おおわがわ}付近までの範囲を指す。御勅使川扇状地内では、北の下円井断層南端から南アルプス市新田付近の山麓まで、活断層が伏在していると考えられる (Ikeda et. al. 2009)。なお、御勅使川の扇状地面上には、有野～飯野新田付近で地形面に撓曲状の高度不連続が指摘されており (糸静線断層帯重点的調査観測変動地形グループ 2010)、本図の作成にあたる調査でも、詳細DEMに基づく断面の計測により、測線の位置によっては幅広い撓曲状の不連続を持つ断面が得られることが認められた。しかし、これらは御勅使川の旧流路を横切る断面形 (旧流路の侵食崖) の可能性もあることから、本図では推定活断層とした。

御勅使川扇状地以南では、初版図との重要な違いとして、山麓部のトレースだけでなく、山地内に新たに活断層（3a-1）を認定した点が挙げられる（後述）。初版図でも図示された山麓部のトレースは、本図の作成にかかる調査においては、山地側のみに分布する下位段丘面（多くは微地形のため、本図では不記載）を変位基準に追認され、山麓線に概ね沿って分布する。大和川左岸では、下位段丘面に撓曲を伴う。御勅使川右岸の築山付近に分布する中位段丘面は、東縁部が撓曲変形することや、中央部に東落ちの低断層崖（写真5）が発達することが指摘されており（澤1981；糸静線断層帯重点的調査観測変動地形グループ 2010；杉戸ほか 2019），今回の調査においても低断層崖の位置で on-PM1（100ka；町田・新井編 2003）層に約 4m の変位を確認している。本図における 3a-1 のトレースは、この低断層崖の南延長にあたる。



写真5：築山付近の低断層崖（2025年2月2日 山中撮影）

3a-1： 山地内に鞍部列と2本の河谷の左屈曲が認められ、トレースの南端では、下位段丘面上に東落ちの変位が認められる。今回の調査において、トレース南端付近の下位段丘面では、段丘崖に沿った露頭で段丘構成層下限にあたる基盤岩の平坦な侵食面が断続的に確認され、段丘面上の低断層崖を挟んだ位置で侵食面に約4mの東落ちの高度不連続が認められた。不連続が生じる地点の露頭では、やや破碎された基盤岩が高角度な面で段丘堆積物と接する活断層露頭が確認された（写真6）。



写真6：3a-1 のトレース南部において確認された活断層露頭
(2025 年 2 月 2 日 山中撮影)

3b： 大和川右岸から北新居にかけて、山麓に分布する下位段丘面と扇状地との境界部、扇状地地面上に撓曲を伴う明瞭な低崖が確認される。初版図では、この場所において1条の活断層を確認していたが、今回の調査においては、山麓側に活断層を確認し、東西2条に分かれて並走する南の市之瀬台地と同様の特徴が認められた。また、この区間で下位段丘面を変形させる活断層を新たに確認している（付図 3b-1：写真7）。



写真7：新たに確認された低断層崖 (2025 年 2 月 3 日 山中撮影)

3c: 北新居から^{ふかさわがわ}深沢川左岸にかけて、下位段丘面・中位段丘面上に多数の活断層が確認された。この場所では、初版図においても東落ちの活断層 5 条と広範な撓曲が確認されており、今回の調査では、その撓曲範囲内において左横ずれ断層、逆向き（西落ち）の活断層を新たに確認している。

南條付近では、6 条の活断層群（うち 5 条が東落ち、1 条が西落ち）と撓曲（前縁の下位段丘面上に短波長、背後の中位段丘面上に長波長）を認定した。このうちいくつかの活断層は、従来確認されてきた活断層の位置・性状を再検討し、新たに活断層としたものを含んでいる。これらの活断層群の内、盆地側から 4 番目のトレースを横断する 2 本の開析谷が、トレース上で系統的に約 40m 左屈曲することが認められ（写真 8）、このトレースは左横ずれが卓越するとみられる。なお、左横ずれ成分を持つトレースの北西延長部の低断層崖を横切る開析谷には屈曲がみられず、横ずれ変位成分は長波長の撓曲崖内で分散する可能性がある。この活断層群の最も山麓側に位置するトレースは、逆向き（西落ち）の形態を示しているが、ここでは低下側が撓曲変形していることから、撓曲の発達に伴って生じた副次的な正断層の可能性がある。最前縁のトレース上では、トレンチ調査により低角逆断層が確認されている（遠田ほか 2000）。上記断層群の山麓側には、山地と台地を画する活断層が確認されており、隆起側に分布する段丘面に撓曲を伴う。



写真 8：南條付近でみられる左屈曲した河川（2025 年 2 月 3 日 山中撮影）

前述の 3b-1 付近から秋山川にかけて、隆起した扇状地からなる上位段丘面・中位段丘面・下位段丘面から構成される台地（市之瀬台地）が発達する。市之瀬台地

南部に広く発達する上位・中位段丘面ではバルジや逆傾斜のような地形面の変形が確認できる（波長が大きく、図面では地形面の傾動として表示）。

3d： 市之瀬台地東縁に位置するトレースで、3eのトレース（境界断層）の前縁断層にあたる。初版図と概ね同形状のトレースとなっているが、坪川周辺以南において、前縁の撓曲範囲の中腹に東落ちの低断層崖を新たに確認しているなど、LiDAR データを空中写真判読と併用したことで、既存知見と比較してトレース形状に差異が見られる。撓曲は主に扇状地起源の下位段丘面で確認されるが、^{せきのがわ}堰野川南岸に位置する中位段丘面上にも前縁断層に沿って撓曲が確認される。また、これらの中位段丘面の一部では、分布域の中央部で南北方向に延びる東落ちの低断層崖が認められる。

3e： 南アルプス市^{くるわだ}曲輪田から秋山川左岸に至る、山地斜面と市之瀬台地の境界部に位置するトレースで、初版図とはほぼ同様の形状である。上市之瀬付近では、下位段丘面上に撓曲を伴った明瞭な低断層崖が確認された。坪川右岸におけるトレンチ調査（三浦ほか 2002）において、西側隆起の低角な逆断層が確認されている。^{ごうど}神戸以南では、2条のトレースに分岐し、そのうち山麓側のトレースは市之瀬台地と山地斜面を画し、下位段丘面をわずかに東落ち変位させる。一方、東に分岐したトレースは、下位段丘面上に撓曲を伴う明瞭な低断層崖が発達し、秋山川左岸まで連続している。

3f： 秋山川から市之瀬断層群南端部にかけて、山地斜面と低位段丘面との境界部およびそれから数百 m 前縁部に、それぞれ断続的に撓曲を伴った活断層が分布している。この特徴は、特に^{とがわ}戸川以南で顕著である。前縁断層は、走向の変化が著しく、境界断層と前縁断層を結ぶような走向の断層も存在し、複雑な分布様相となっている。^{わだいら}上平付近では、撓曲を伴った東落ちの低断層崖とそのすぐ背後に同じく東落ちの低断層崖が確認され、その背後では北西方向に地形面が傾動している。山中ほか（2023）は、秋山川右岸においてトレンチ調査を行い、段丘構成層の撓曲を伴う低角な活断層を確認している。また、^{つきよね}春米付近で低位段丘面と扇状地面を画し、撓曲を伴う低崖を一部新たに確認している。

3g： 富士川町^{かじかざわ}鰯沢付近では、3fの延長線上の山麓部に直線的な崖地形がみられるが、確実な断層変位地形が確認できず、推定活断層とした。

4. 富士見山断層群

- ・走向 : 北東－南西
- ・長さ : 約 5km
- ・断層種別 : 活断層（縦ずれが主体）、推定活断層

（※上記の各諸元については、本図内における計測及び確認結果である）

（１）概要

富士見山断層群は、南側に隣接する「身延」（田力ほか 2025）から連続し、富士川町駅前通付近まで延びる活断層および推定活断層である。本図には富士川町駅前通二丁目から富士川町鳥屋付近まで、北東－南西方向に延びる長さ約 5km の区間が記載されており、一部縦ずれの変位を含む。この断層は、池田ほか（2009）により活断層として図示された曙断層のトレースと概ね一致する。

（２）判読根拠

本断層の主な地点ごとの判断根拠は次の通りである。

4a: 市川三郷町黒沢付近には中位段丘面が発達し、大木集落付近の沖積低地を挟んで南側にわずかに分布する中位段丘面は、沖積低地の北側に分布する中位段丘面よりも 30m 程度低い。南側の中位段丘面は、露頭で段丘構成層が確認され、写真 9 のような花崗岩類の巨円礫を含む礫層より構成される。また、構成層の上には層厚 1m 以上のローム層が堆積する。大木集落付近の集水域に花崗岩類の露出は知られていないことや、巨礫を運搬できる大規模な河川がないことから、この中位段丘面は富士川の本流により形成されたと考えられる。しかし、この面と現在の富士川流路との間には、この面より高所に大木集落北側の中位段丘面が発達しており、南側の中位段丘面の形成時に同様の比高があった場合には、現在の大木集落付近への富士川流入を阻むこととなる。したがって、当初これらの中位段丘面は同様の高度で形成され、その後に北側が相対的に隆起したと考えられる。したがって、両者の間に北側隆起の活断層が分布すると考えられる。北側の中位段丘面は背斜状の丸みを帯びることから、北側の中位段丘面南縁の段丘崖基部付近にトレースが認定された。なお、大木集落付近の沖積低地は、富士川河床より 90m 以上高所に分布しており、下流側が隆起することで閉塞された環境に発達したと考えられる。

このトレースの西側には、大木集落付近のものより相対的に低い中位段丘面群が発達する。池田ほか（2009）では法師倉集落が載る段丘面の北西縁に活断層を図示しているが、本図作成にかかる現地調査により、池田ほか（2009）のトレース位置では段丘構成層下限にあたる基盤の侵食面に変位や破碎が認められないことが確認された。一方、その北の中位段丘面（図上では中位段丘面2としたもの）は、富士川の流向と直交する東西方向の崖によって二段に区分され、このうち上位側の段丘面にわずかに撓曲状の変形が認められることから、本図ではこの崖の基部に沿って活断層を認定した。



写真9：中位段丘面を構成する礫層に含まれる巨円礫
(2025年2月4日 山中撮影)

4b： 4aの延長線上、小柳川^{こやながわ}から鳥屋にかけての区間では、山地内の尾根の鞍部や傾斜変換点を連ねたリニアメントを挟み、山地高度に北側が高く南側が低い不連続が見られる。このリニアメントに沿っては、地質断層の曙断層が知られており（大塚1938）、今回の調査でもリニアメント上の梅久保東方の谷中（35° 30'48.24"N, 138° 26'29.16"E）においてもガウジ（断層運動に伴って両側の岩石が砕かれて生じる粘土）を伴う断層露頭を確認している（写真10）。この露頭における断層面の走向はN55° Wであり、リニアメントの大局的なトレースとはやや斜交する。傾斜は66° Nである。この露頭では第四紀の堆積物は分布しないことから、最近数十万年間における活動の有無は不明である。リニアメント東側の鬼島^{おにじま}付近では、沖積錐に地形面の傾斜方向と直交する南北方向の崖が認められ、崖より東の面が低くなっている。しかし、この地形は富士川の側方侵食で形成された崖下に新期の沖積

錐が発達することでできた可能性がある。以上のように、本トレースは最近数十万年間に繰り返し活動した証拠が得られていないことから、推定活断層とした。



写真10：梅久保付近において確認された断層露頭（2025年2月2日 山中撮影）

その他、推定活断層としては、^{おおなじかとうげ}大駒鹿峠付近の断層、^{くしがたやま}櫛形山断層群、駒場南方の断層、南アルプス市高尾付近の断層、伊奈ヶ湖付近の断層、源氏山西方の断層、^{いちかわみさとちょうおちい}市川三郷町落居から^{いわま}岩間に至る断層が記載されている。

5. ^{おおなじかとうげ}大駒鹿峠付近の断層

- ・走向　　： 北北西－南南東
- ・長さ　　： 約3 km
- ・断層種別　： 推定活断層

（※上記の各諸元については、本図内における計測及び確認結果である）

（1）概要

「韮崎 改訂版」（中埜ほか 2023）から連続し、南アルプス市のタツノ沢上流付近まで、北北西－南南東方向に延びる推定活断層である。本図には図面の北辺から南アルプス市のタツノ沢上流付近まで、一部に縦ずれの変位を含み、北北西－南南東方向に延びる長さ約3 km の区間が記載されている。

(2) 判読根拠

山地斜面に逆向きの低崖が連続的に分布している。しかし、段丘面の存在が確認できず過去の活動の累積性が不明であるほか、重力変形地形の可能性もあることから推定活断層と判断した。

6. 櫛形山断層群

- ・ 走向 : 北北東－南南西
- ・ 長さ : 約 5 km
- ・ 断層種別 : 推定活断層

(1) 概要

南アルプス市と富士川町の境界に位置する櫛形山の南北方向の主稜線に並行して、北北東－南南西方向に延びる長さ約 5 km 推定活断層である。山頂部や山腹に縦ずれの変位を伴う数条のトレースが分布している。

(2) 判読根拠

山頂部に明瞭な逆向きの崖地形（写真 11）が連続的に発達する。しかし、段丘面の存在が確認できず過去の活動の累積性が不明であるほか、重力変形地形の可能性もあることから推定活断層と判断した。



写真 11：唐松岳から西方に 500m の地点で谷底を横切る逆向きの崖。堰き止めにより小規模な堆積場が発達する。（2022 年 12 月 太田凌嘉氏撮影）

7. 南アルプス市^{こまば}駒場南方の断層

- ・走向 : 北東－南西
- ・長さ : 約 1 km
- ・断層種別 : 推定活断層

(1) 概要

南アルプス市駒場南方に位置し、北東－南西方向に延びる長さ約 1km の推定活断層である。山腹に縦ずれの変位を伴う 1 条のトレースが分布している。

(2) 判読根拠

山地斜面に適従せず流路が山腹で直角に曲がる水系異常を伴った直線状の地形が確認される。山体重力変形や河川争奪によって形成された地形の可能性もあることから推定活断層と判断した。

8. 南アルプス市^{たかお}高尾付近の断層

- ・走向 : ほぼ東西
- ・長さ : 約 1 km
- ・断層種別 : 推定活断層

(1) 概要

南アルプス市高尾付近に位置し、ほぼ東西方向に延びる長さ約 1 km の推定活断層である。山腹に縦ずれの変位を伴う 1 条のトレースが分布している。

(2) 判読根拠

明瞭な直線状の逆向き低崖が存在する。山体重力変形による地形の可能性もあることから、推定活断層と判断した。

9. 伊奈ヶ湖^{いながこ}付近の断層

- ・走向 : ほぼ南北
- ・長さ : 約 3 km
- ・断層種別 : 推定活断層

(1) 概要

南アルプス市高尾付近から南伊奈ヶ湖南方に位置し、ほぼ南北方向に伸びる長さ約 3km の推定活断層である。

(2) 判読根拠

櫛形山の山体東斜面には、高尾集落、立沼、伊奈ヶ湖が位置する南北方向に伸びる低地帯が認められる。この低地帯の西縁に沿って急崖が直線上に伸びることから、この位置に低地帯を形成する断層が分布する可能性がある。低地帯には、構成層および被覆層中に第四紀後期の複数の御嶽火山系テフラおよび広域テフラを挟在する段丘面群が発達する（太田ほか 2025）。しかし、トレース付近では地滑り地形が発達し、段丘面の確実な変位を確認できないため、推定活断層と判断した。

10. ^{げんじやま}源氏山西方の断層

- ・走向 : 北北西－南南東
- ・長さ : 約 3 km
- ・断層種別 : 推定活断層（縦ずれが主体）

(1) 概要

富士川町の源氏山付近に位置し、北方の丸山^{まるやま}東麓から源氏山付近まで、北北西－南南東方向に伸びる長さ約 3 km の推定活断層である。山腹に縦ずれの変位を伴う。

(2) 判読根拠

山地斜面の傾斜方向を横切る明瞭な逆向き低崖が断続的に存在するが、山体重力変形による可能性もあることから、推定活断層と判断した。

11. ^{いちかわみさとちょう おちい いわま}市川三郷町落居から岩間に至る断層

- ・走向 : 北東－南西
- ・長さ : 約 1 km
- ・断層種別 : 推定活断層（右横ずれが主体）

（※上記の各諸元については、本図内における計測及び確認結果である）

(1) 概要

市川三郷町落居^{いちかわみさとちょうおちい}から南側に隣接する「身延」(田力ほか 2025) 図面内の同町岩間^{いわま}まで延びる推定活断層である。本図には市川三郷町落居から図面の南辺まで、北東－南西方向に延びる長さ約 1 km の区間が記載されている。

(2) 判読根拠

尾根・谷の系統的な右屈曲が認められるものの、段丘面の存在を確認できず、屈曲も不明瞭なことから推定活断層と判断した。

(千葉県立中央博物館研究員 山中 蛸)

引用文献

- 池田安隆・岩崎貴哉・狩野謙一・伊藤谷生・佐藤比呂志・阿部信太郎 2009. 「3. 1 断層帯の地下構造解明のための反射法地震探査および重力探査」. 糸魚川－静岡構造線断層帯における重点的な調査観測平成 20 年度 成果報告書.
- 糸静線断層帯重点的調査観測変動地形グループ 2010. 糸魚川－静岡構造線断層帯変動地形資料集 4南部(白州－鰐沢間).
- 今泉俊文・澤 祥・東郷正美・池田安隆 1998. 『1:25,000 都市圏活断層図「甲府」』国土地理院.
- 太田凌嘉・渡辺 樹・苅谷愛彦 2025. 巨摩山地・櫛形山周辺で新たに見出された後期更新世のテフラ. 第四紀研究 64(1): 1-12.
- 大塚彌之助 1938. 山梨県南西部富士見山断層崖の地質学的考察. 地理学評論 14(12): 1-16.
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会 2015. 糸魚川－静岡構造線断層帯の長期評価(第二版). https://www.jishin.go.jp/main/chousa/katsudansou_pdf/41_42_44_itoigawa-shizuoka_2.pdf. (2025 年 7 月 22 日閲覧)
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会 2006. 曾根丘陵断層帯の長期評価について. https://www.jishin.go.jp/main/chousa/katsudansou_pdf/104_sone-kyuryo.pdf. (2025 年 7 月 22 日閲覧)
- 杉戸信彦・古澤 明・澤 祥・田力正好・谷口 薫・渡辺満久・鈴木康弘 2019. 山梨県南アルプス市築山における糸魚川－静岡構造線断層帯南部区間の平均変位速度. 地学雑誌 128(3): 453-464.
- 澤 祥 1981. 甲府盆地西縁・南縁の活断層. 地理学評論 54(9): 473-492.
- 産業技術総合研究所 2017. 「2 曾根丘陵断層帯(山梨県)」. 「内陸及び沿岸海域の活断層調査平成 28 年度成果報告書」.

- 田力正好・中田 高・渡辺満久・松多信尚 2025. 『1:25,000 活断層図「身延」』国土地理院.
- 遠田晋次・三浦大助・宮腰勝義・井上大栄 2000. 糸魚川-静岡構造線活断層系南部の最近の断層活動 ―白州断層・下田井断層・市之瀬断層群トレンチ調査―. 地震 第2輯 52(4): 445-468.
- 中埜貴元・山中 蛭・楮原京子・金田平太郎・澤 祥 2023. 『1:25,000 活断層図「韮崎 改訂版」』国土地理院.
- 町田 洋・新井房夫編 2003. 『新編火山灰アトラス：日本列島とその周辺』東京大学出版会.
- 丸山 正・斉藤 勝 2005. 甲府盆地南縁, 曾根丘陵断層帯の完新世の活動に関連する変位地形. 活断層・古地震研究報告 5:69-76.
- 丸山 正・斉藤 勝 2006. 甲府盆地南縁, 曾根丘陵断層帯の古地震調査. 活断層・古地震研究報告 6:71-87.
- 三浦大助・幡谷竜太・阿部信太郎・宮腰勝義・井上大栄・二階堂学・橘 徹・高瀬信一 2002. 糸魚川-静岡構造線活断層系市之瀬断層群の最近の断層活動 ―中野地区トレンチ調査―. 地震 第2輯 55: 33-45.
- 安江健一・杉戸信彦・廣内大助・山中 蛭 2025. 『1:25,000 活断層図「塩山」』国土地理院.
- 山中 蛭・後藤秀昭・森 渉・牧田智大 2023. 糸魚川-静岡構造線活断層系・市之瀬断層群の左斜めずれ運動と活動時期. 2023 年度地理科学学会春季学術大会一般研究発表要旨集 21.
- 山梨県編 2004. 甲府盆地の地下構造調査. 山梨県総務部消防防災課.
- Ikeda, Y., T. Iwasaki, K. Kano, T. Ito, H. Sato, M. Tajikara, S. Kikuchi, M. Higashinaka, T. Kozawa, and T. Kawanaka (2009) : Active nappe with a high slip rate: Seismic and gravity profiling across the southern part of the Itoigawa Shizuoka Tectonic Line, central Japan, *Tectonophysics* 472:72–85. DOI : <https://doi.org/10.1016/j.tecto.2008.04.008>.

調査に使用した諸資料及び検討委員会等

1) 使用した空中写真

撮影計画機関（種別）	撮影縮尺	地区番号又はコース番号
米軍（モノクロ）	およそ 1/10,000	R1228, R204, R376, R772
米軍（モノクロ）	およそ 1/40,000	M662, M1010-3R, M1168, M1169
山梨県（モノクロ）	1/20,000	山-352, 山-391, 山-392
国土地理院（モノクロ）	1/20,000	CB571YZ, MCB6210X
国土地理院（カラー）	およそ 1/10,000	CCB7516, CCB7517, CCB7615

2) 使用した航空レーザ測量データ

測量計画機関	計測年度	業務名
関東地方整備局富士川砂防事務所	2009	H21 大規模崩壊地対策航空レーザ計測その 3 業務
関東地方整備局河川部	2006	平成 18 年度関東地方整備局管内河川航空レーザ測量業務
関東地方整備局甲府河川国道事務所	2013	H24 富士川航空レーザ測量業務

上記のほか、基盤地図情報数値標高モデル（DEM5A）を使用した。



航空レーザ測量データ使用範囲（グレー色塗りつぶし部：データ使用部，赤枠：図郭）。

3) 地形分類に使用した資料

地形分類については、下記資料のほか、国土地理院の治水地形分類図、国土庁や各都道府県で実施した土地分類基本調査の地形分類図および表層地質図、防災科学技術研究所の「1:50,000 地すべり地形分布図」等を参考にして、空中写真および数値標高モデル（DEM）を用いて国土地理院が作成した。

- ・糸静線断層帯重点的調査観測変動地形グループ 2010. 糸魚川－静岡構造線断層帯変動地形資料集 4 南部（白州－鯉沢間）.
- ・澤 祥 1981. 甲府盆地西縁・南縁の活断層. 地理学評論 54(9):473-492.
- ・下川浩一・水野清秀・井村隆介・奥村晃史・杉山雄一・山崎晴雄 1995. 『糸魚川－静岡構造線活断層系ストリップマップ』. 構造図 11. 地質調査所.

4) 全国活断層帯情報整備検討委員会

a. 委員会等の開催

第 1 回委員会	令和 6 年 6 月 12 日(水) オンライン会議
第 2 回委員会	令和 6 年 12 月 23 日(月) 国土地理院関東地方測量部
第 1 回活断層図作成部会	令和 6 年 9 月 6 日(金) 国土地理院関東地方測量部
第 2 回活断層図作成部会	令和 6 年 11 月 5 日(火) 国土地理院関東地方測量部
第 3 回活断層図作成部会	令和 6 年 12 月 23 日(月) 国土地理院関東地方測量部

b. 曾根丘陵断層帯及び糸魚川－静岡構造線断層帯とその周辺「甲府 改訂版」の調査担当者 (令和 6 年度)

図 名	氏 名	所 属
甲府 改訂版	○ 山中 蛭	千葉県立中央博物館研究員
	太田 凌嘉	中央大学・日本学術振興会特別研究員 現在：新潟大学助教
	澤 祥	鶴岡工業高等専門学校名誉教授
	杉戸 信彦	法政大学教授
	松多 信尚	岡山大学教授

○印は、全体のとりまとめを担当した委員，その他の委員は五十音順。

5) 連絡先

国土地理院応用地理部地理情報処理課
〒305-0811 茨城県つくば市北郷1番
電話：029 (864) 1111 (代表)

6) 引用する場合の記載例

a. 図を引用する場合

山中 蛭・澤 祥・杉戸信彦・松多信尚・太田凌嘉 (2025) : 1:25,000 活断層図「甲府 改訂版」. 国土地理院.

b. 解説書を引用する場合

山中 蛭 (2025) : 1:25,000 活断層図 曾根丘陵断層帯及び糸魚川-静岡構造線断層帯とその周辺「甲府 改訂版」解説書. 国土地理院, 26p.

【付図（断層索引図）】

